図書館活用法　第 5 講 （2007 年度） 生田キャンパス

図書の歴史と図書館

2007 年 10 月 19 日（金）

明治大学図書館　高橋美子

目次

1. はじめに … p.1
2. 書き記すということ … p.1～4
3. 教養について …p. 5～7
4. 記録について … p.7～13
   (1) 文字の誕生 … p.7～9
   (2) ヒエログリフ … p.9～11
   (3) 楔形文字 … p.11
   (4) アルファベット … p.11～12
   (5) 漢字 … p.12～13
5. 図書館の歴史 … p.13～22
   (1) 大学図書館 … p.14～16
   (2) イスラム世界 … p.16
   (3) 印刷術の発明 …p.16～17
   (4) ルネサンス …p. 17
   (5) 16～18 世紀 …p. 17～19
   (ドイツ)
   (フランス)
   (スペイン)
   (イギリス)
   (6) 17～18 世紀 …p.19
   (7) 19～20 世紀 …p.19～20
   (8) 20 世紀～ …p.20
   (9) 日本の図書館 …p.20～22
5. 図書館の自由について …p.22～23

2007 年度　図書館活用法　第 5 講 「図書の歴史と図書館」

2007 年 10 月 19 日（金）　高橋美子

1．はじめに

生田キャンパスは、理工学部と農学部の 2 学部があり、2 つの学部の 1 年生から大学院後期までの学生・大院生と教職員から構成されています。明治大学は生田キャンパスの他に、駿河台キャンパス、和泉キャンパスがありますが、教養課程から専門課程、大学院まで一つのキャンパスで学べるのは生田キャンパスだけです。生田キャンパスには、教室棟や実験棟の他に、研究施設、圃場などがありますが、キャンパスのちょうど中心に図書館があります。生田キャンパスを一つの宇宙と見立てると、宇宙の中心に図書館があるというわけです。

日本だけでなく、世界中の大学のキャンパスの中には必ず図書館があります。図書館のない大学はありませんし、また、図書館を持たない国民も殆どありません。ただし、置いてある図書の種類は、国家体制やその国の宗教によってかなり異なることはあります。生田図書館の場合は、理工、農学部のキャンパスということで、自然科学、工学・技術系の図書と雑誌を中心に収集しています。

ではなぜ、学びの場所だけでなく、人間が生きる場所には図書館や本があるのでしょう？これからこの理由を考えていきたいと思います。

2．書き記すということ

図書館は英語で library ですが、その語源をたどるとラテン語の Liber(木の皮)になります。図書館は木の皮、すなわち樹皮を集めたところという意味です。さあ、これはどういうことでしょうか？図書館には何が置いてあるでしょう？それは「本」です。「本」という漢字の成り立ちを見てみると、木という字の下に一を加えて、元来は木の下の部分、根元を示す意味であり、やがてそれは土台となるもの、基本となるものの意味になりました。

すなわち本は、人間がこの宇宙空間に誕生して以来、見たこと、聞いたこと、感じたこと、経験したこと、発見したり、発明したこと、さらに想像力を駆使して書いたものなどありとあらゆる事柄を書き記したものであり、本はすべての土台となるものという意味があるのです。その土台となるもの、本を集め、体系的に整理して保管し、必要に応じて利用に供するところ、それが図書館です。

私たちは生まれてから死ぬまで、それぞれの時期に、人類が経験して積み重ねた知恵や知識を、自分で意識する、しないに関わらず、取込んだり、それらをもとにした新たな知識を発信したりしています。その方法は最初は親からの語りかけ、すなわち言葉から始まり、文字が読めるようになると紙に記されているもの、新聞や本からであったり、最近ではインターネット上からも情報や知識の受発信をします。しかし、最も長

い間、人が使ってきた知識や経験の確かな伝達や獲得の手段は書き記すということでした。

洋の東西を問わず、体系的な文字が出現する以前から、人間は、自分たちがここにいたという確かな証拠を示すために、記号や絵を使って書き記し、残してきました。紙が発明される以前は、知識や知恵の伝達や部族の伝承、決まりごとなどを樹皮や木片、粘土や石などに、アジアではそれらに加えて竹、絹布などに書き記しました。ライブラリーの語源が木の皮であることがここからもわかります。

筆記素材はなんであれ、人は書き記すこと、それを周囲の人たちや後世の人たちに伝達することに非常な熱意を傾けてきたのです。誰かに伝えたい、知っておいてほしい、教えてあげたいこの気持ち！それらの蓄積が叙事詩や音楽や芸術や学術を生みだし、その伝達の手段としてやがて本が生まれていったのです。

筆記素材も時代が進むにつれ、書きやすいものが作り出されました。紀元前 5000 年頃には古代エジプトでパピルス（かやつり草科の水辺植物）の繊維を縦横に貼り合せたパピルス紙が生まれました。現在の paper の語源となったものです。紀元前 2 世紀頃にはパーチメント（羊皮紙）やヴェラム（子牛皮紙）などが使われるようになり、やがて紀元前後に中国で紙が発明されると、それはシルクロードを通り、長い時間をかけて西へと伝わっていきました。唐（618-907）とイスラム国家であるアッバース朝（750～1258）との戦いで有名な 751 年のタラス川（現在のキルギスタン）の戦いで中国の製紙工が捕虜となり、イスラム世界に紙の製法が伝えられたことはみなさんも世界史の教科書で学んだとおりです。大量殺戮兵器の出現によって戦争の世紀といわれる 20 世紀より前の戦争では、戦いが異文化に触れ、さらに未知の技術や知識が広まるきっかけとなったことは世界の歴史において事実です。羊皮紙やヴェラムが作られるようになったのも、当時パピルスの輸出を一手に握っていたプトレマイオス朝エジプトが、戦いの相手である小アジアのペルガモン王国にパピルスを禁輸したからです。

タラス川の戦いのわずか 6 年後の 757 年にはサマルカンド（現在のウズベキスタン）に製紙工場ができます。この紙はサマルカンド紙と呼ばれ、製紙工場は、バクダッド（現在のイラク）、ダマスクス（現在のシリア）、カイロ（エジプト）にもできていきます。

イスラム国家で盛んに紙が作られた理由は何か？それはイスラムという宗教の本質と関わることに理由があります。イスラム教徒にとって唯一神アッラーと個人の関係は一対一の直接的なものであり、両者の間にはカソリック教会のように神と人の間には神の代理人である法王や聖職者は介在しません。ゆえに神の言葉である『コーラン』は常に個人の手元に置くものとされ、『コーラン』の印刷のために紙は高い需要があったのです。コーランが読めるということは字が読めるということであり、アッバース朝以降のイスラム社会が学術の世界において隆盛を誇ったのは、コーランの普及に一つの理由があり、一方でイスラム国家は異教徒にも寛大な政策をとったので、外国との往来も盛んでした。知識人や学者の行き来も活発で識字率の高いところは、学術も盛ん

になり、学術が盛んになれば本が多く作られていきます。本のあるところ、図書館が誕生します。

やがて紙はイスラム世界からヨーロッパへ伝わりました。ヨーロッパに紙が入ったのは、紀元 8 世紀頃のことですが、紙を生産する製紙工場ができたのはイスラム支配下にあった 1150 年頃スペインバレンシア地方のハティバ（Jativa）です。中国で紙の製法ができてからシルクロードを通り、ヨーロッパで製紙工場ができるまでには 1000 年あまりの年月が流れ、紙が普及するまでさらに 400 年近い年月が必要でした。なぜ、このような時間がかかったのかは、イスラム国家とは反対に中世ヨーロッパでは、神の言葉である『聖書』は教会が管理し、神との対話も教会を通してであり、人々の識字率も低いものでした。知識や技術は聖職者などごく一部のものであり、（ワインやビールの製造や、薬学や医療も修道院で行われていたことはみなさんも聞いたことがあると思います）キリスト教が入ったヨーロッパにおいて、学術は大きな広がりを見せることはなく、付随する本の生産も少なく、紙の需要が低かったからだと考えられています。

みなさんは 15 世紀半ばのグーテンベルグの印刷術の発明は知っていると思いますが、これも紙が普及し始めたからこその発明であり、印刷術による聖書の普及によって、人々に読み書き能力が広まり、やがてはルターによる宗教改革の遠因になりましたが、紙の普及、印刷術の発明、本の生産と流通、一般庶民の知識の獲得、学術の発達と隆盛は一連の流れの上で起きていることがわかります。

聖書から始まり様々な学術や知識・経験の伝達手段として印刷された本からは、人類の行動や思索、そして世界をも大きく変えてしまうほどの情報が広がっていったのです。現在はインターネット上の情報が瞬く間に世界に広がりますが、印刷術の発明による本の流通は、人類の歴史において情報の受発信のエポックメーキングであったことがわかります。

目を東に転じると東方に紙が伝わるのは早く、朝鮮には 4 世紀頃に入り、日本には 7 世紀に紙が百済王から送られたと『日本書紀』にあり、5～6 世紀には渡来人である秦氏などによって行政文書や戸籍の記帳に必要な紙は作られていたと考えられています。聖徳太子は仏教を広めるために写経を奨励したことが、紙の需要を増やしたことにつながったといわれていますが、宗教が学術の発展に関与することは洋の東西を問わないことがわかります。これは朝鮮半島においても同じです。

日本で官立の製紙工場ができたのは、701年に政府文書の保管と歴史編纂を行う図書寮の中に造紙所が最初といわれています。都が京都に移った後も図書寮の中に「紙屋院」（朝廷の権力が衰えた室町初期まで存続）の名称で製紙を行うための機関がもうけられ、平安時代に和紙の製法はほぼ出来上がったといわれています。今でも京都の西北鷹峯あたりに小さいですが美しい紙屋川という川が流れていますが、往古この川の水で紙を漉いた紙屋院があったことの名残です。室町時代末期に描かれた『七十一番職人歌合』を見ると紙漉き職人の姿がありますが、官立から離れ、紙漉きを

生業とする職人がいたことがわかります。しかし、紙が一般に普及し、本が多く印刷されるのは江戸時代を待たなければなりませんでした。

江戸幕府は鎖国政策をとり、海外の製紙技術が入ってこなかったことで、日本の和紙製造技術は各地で独自の発展を遂げ、また反故紙のリサイクルも非常に盛んでした。明治大学図書館の貴重書庫に入って江戸時代の和装本を見ていますと、反古紙を使って作られた本がたくさんあります。幕末に来訪した西洋人たちが一様に驚いて記録を残しているのは、日本には紙があふれ、たくさんの本が出版されており、庶民の識字率が高いこと、さらに鼻をかむにも紙を使っていることなどです。19 世紀に入ると欧米では、現在と同じような亜硫酸による木材パルプ製法が始まりますが、鼻紙につかうほど紙の値段は安くはありませんでした。今でも西洋人は鼻をかむのにハンカチを使いますが、彼らと日本人の紙に対する歴史的な感覚の違いなのです。

人類が誕生以来さまざまなものが、考えられ発明されてきました。その根の部分を掘り下げていくと、複数の人間が出会えば、最初に言葉が発せられ、文字が生まれ、書写材料が発明され、書き記された結果は本となり、学術や知識が後世へ伝達されていくことが見てきます。その大元となる動機は、書き記したいという人間の強い気持ちです。

鳴き声の中である一定の音声を用いて会話をしているのではないかと考えられている動物はいますが、人は地球上で唯一書き記すという行為をする生き物です。書くことで抽象的なものが形を持ち、書かれたものを他者が読むことで複数の人間の間に共通理解が生まれます。点字も含め、言葉や考えを文字に書き記すのは人間だけです。書写材料がなかった時代から人は岩や洞窟に書き記してきました。人類が誕生し、記録という行為を始めて以来、人が遭遇し、経験してきたあらゆる出来事や、人はどのように思索してきたか、どのように問題に対処してきたかはすべて本の中に記録されています。

人類の知的遺産である古今東西悠久の時間を潜り抜けた本が集まっているところが図書館です。今後も紙から電子へと書写媒体は変わっても、人間は書き記すと言う行為をやめないでしょう。図書館は媒体は何で荒れ人類の記録を集め続けるところであり、世界中の知識を求める人々に本を提供することを使命とする機関なのです。

随分前ですが、作家の野坂昭如が出演したコマーシャルで「みんな悩んで大きくなった」というものがありました。人間の世界には固有の問題はなくて、それぞれの時代の衣装をまとってはいても、起こる事柄は本質的に変わらない、ゆえに人間が長い歴史の中で書き記してきた本の中には、悩んだ時や生きていくために手助けとなる知恵が無尽蔵に詰まっています。どの本を選ぶか、何を読めばよいか？それは、先生や図書館員に聞いてください。的確なアドバイスをしてくれるはずです。

3. 教養について

さて、皆さんは図書館活用法第 2 講「図書の歴史と図書館」のシラバスの文章を読んで、随分難しいことが書いてあるなと思われたのではないでしょうか。いきなり、「教養について考えたことがありますか？」と聞かれて「はい」と答える人はなかなかいないと思います。教養は英語で Liberal Arts ですが、教養そのものも時代や地域によって変ります。

それでは、ここで教養について少し話をしましょう。カリキュラムに教養科目という言葉がでてきたり、就職試験で教養試験が行われたり、あの人は教養がないという言葉を聞いたことがあると思います。なぜ、教養を学ばなければならないのか、そもそも教養とは何ぞや？という話です。

教養という概念がどのように成り立ってきたのか、教養とは具体的にどのようなものをいうでしょうか。それは古代ギリシア、ローマを起源とする「自由七科」(Seven Liberal Arts, Septem Artes Liberales＝セプテム　アルテス　リベラーレス)　すなわち、言語に関する三科（Trivium＝トリヴィウム）文法、修辞学、論理学と数に関連した四科（Quadrivium＝クアドリヴィウム）算術、幾何学、天文学、音楽の七つの科目をさします。これらが現在の教養教育＝リベラル・アーツの源流となったものです。そもそもリベラルという言葉は、肉体労働から解放された自由人という意味であり、その対極は自由意志を持てない奴隷をいいます。哲学者のアリストテレスは、奴隷はしゃべる家畜と位置づけています。リベラル・アーツとは自由人として生きるために必要な知識のことをいいます。この自由人という意味が大きいのです。

古代ギリシア、ローマは民主制国家といわれますが、古代ギリシアの民主制の最終段階であるペリクレスの時代（B.C.443～B.C.429）には、当時参政権を持つ市民は約 18 万、女性には参政権はなく、労働に従事している奴隷は 11 万でした。古代地中海世界は奴隷制の上に成り立っている社会です。民主制国家といっても、現代の民主制とは内容が大きく異なります。自由は万人に与えられているわけではなく、獲得することは古代でも現代でも容易なことではありませんでした。しかし、リベラル・アーツすなわち教養が自由人として必須の知識であるということは、皆さんが教養というものを考え、教養を学ぼうとする時に抑えるべきポイントです。

当然ながら知識はいつの時代でも固定化されるものではありません。リベラル・アーツも時代が下がるにつれ枝葉を伸ばし、種子を飛ばして新たな株が生まれました。

ヨーロッパでは 11 世紀から 13 世紀にかけて、農業技術の改良に伴って（三圃制農業　さんぽせい　のうぎょう⇒耕地を三分割し、秋作→春作→休閑地=放牧を繰り返す）、食糧生産量が増大し、人口も飛躍的に増加しました。

それでは農村で余剰となった人口はどこに向かうかといえば都市です。これは洋の東西や時代を問いません。現代も同じです。人口が増えれば同じ仕事に従事する人間の数も増えて、それらは自分たちの権益を守り、公的な権力（領主や教会）の不法な介入から自分たちを守るために集団を作ります。さらに自分たちの存在と位置づけ

を内外に明確にするために、法的な文書を作成する必要がでてきます。

自由七科の一つである修辞学（Rhetorica＝レトリカ）はもともと古代ギリシアの哲学者アリストテレス（前 384～前 322）の『修辞学』から始まるといわれ、聞くものや、読むものに強い影響力を与えるように言葉や文章を最も有効に表現する方法を研究する学問です。雄弁術、弁論術ともいわれます。法学は、この修辞学を母体として生まれた学問です。社会が次第に変化する中で、従来の修辞学の中に、公文書の作成や公文書に必要な歴史や、法律の知識まで含むようになり、やがて法学が学問と成立していったのです。修辞学から法学が生まれたと言っても日本人には理解しにくいかもしれませんが、弁論術から法学が生まれたということは納得できます。

ヨーロッパ中世も 12 世紀に入るとリベラル・アーツは神学、法学、医学を学ぶために必要な基礎科目と位置づけられるようになります。近年、法学部や医学部において、従来の専門知識偏重の教育から、人間としてバランスのとれた知性を養うために教養科目の復権が進んでいます。学問は人間の生活を豊かにするためにあるのですから、教養教育の復権は教育の原点に立ち返ったものだと思います。いくら専門知識があっても、生身の患者の姿が目に入らない医者に手術をしてもらいたいとは思いません。

みなさんは、それぞれ大学に入る時に、大学で自分は何を学んで、将来何をするかを考えて学部選択、学科選択をしたと思いますが、自分が選んだ学問の成り立ちやその背景となるもの、そしてその源流を辿ることはとても大事なことです。そこを押さえておかなければ、自分の学ぶ目的が途中で分からなくなってしまったり、行き詰ってしまうこともあるからです。

なぜ、実学が長い間リベラル・アーツのもとにおかれてきたのか？それは学問の歴史や大学の歴史を紐解けば見えてきます。

ここまで話してきて教養とは、豊かな人間生活を送るための基礎となる知識であり、雑学やトリビア（Trivia＝無駄な知識）ではないということがおわかりいただけたと思います。このトリビアの語源は自由七科の Trivium を皮肉ったものだといわれています。言語に関する三科は学んでも無駄？たしかにここでいう文法は、日常の話し言葉とは異なるラテン語であり、修辞学や論理学は言葉という抽象的記号を使って、論理的思考方法の訓練をする学問ですから、簡単ではありません。もっともこのような論理的に考えるという訓練が、現在の西欧人の思考方法を作ったともいえます。教養は自由人として必要な知識である、このことをみなさんは覚えておいてください。

日本では、明治維新後、それまでの儒学を基本とした学問に代わって、西洋の学問を導入しました。ですから、明治以降、日本の大学で教養という場合、このリベラル・アーツを指すのです。

一方、私たちの文化圏である東アジアに目を転じると、中国には隋代（最初の科挙は 587 年頃）から始まり、清末（最後の科挙は 1904 年）まで行われた官吏登用試験の

「科挙」(かきょ)というものがあります。科挙で必要とされる知識が、中国の読書人＝知識人の教養だったのです。それではその知識、教養とはどのようなものだったのでしょう。

隋唐の科挙の科目には詩賦(詩も賦も韻文の一形式)を作らせること、儒教の経典の解説、法律の条文の解釈があります。時代が下がるにつれ試験科目は増えていきますが、基本的には儒教の経典である四書五経の理解力や法令の解釈、古典文学の知識を基礎としての作詩、作文の能力が問われます。

この 1300 年間余に渡って行われた科挙に一貫しているのは、皇帝に忠義を尽くし、親に孝行し、子孫を残して家を存続することを教えの柱とする(これは皇帝を頂点とした専制国家を維持するために必要な思想でした)儒教の知識を問うものであり、その学問方法は暗記が中心です。科挙の対象となる知識は、思想においても、文学においてもすべて古典学であり、これが後世、新思想の出現を疎外した理由であるといわれます。論理的な思考方法を訓練し、それがやがて科学技術への指向につながった西欧とは対極にあるといえるかもしれません。

科挙は制度として日本では根付きませんでしたが、儒教思想と中国の詩文に対する知識は仏教思想と並んで長く日本文化の教養として必須のものでした。みなさんも自分は仏教の知識や儒教なんて古臭いものは知らないと思っても、茶の湯や能、平家物語や中世の軍記物語には、禅や仏教思想が背景にありますし、子供の頃読んだかもしれない『南総里見八犬伝』や歌舞伎の作品には、しっかりと儒教思想が盛り込まれています。自分が属する文化の基幹にあるものを学ぶこと、これも教養の一つです。

教養についての具体的なイメージはつかめましたか。教養とは一個の人間として自立して生きるために必要な知識です。それでは、これらの教養がどのように現代に伝えられたのでしょうか。人間は地球上で唯一、自己の行為や思索を書き記すという行為をする生物です。では、書くという行為に絶対に必要なものは何かというと、それは記号＝文字です。書写材料があっても、文字がなければ記録することはできません。

4. 記録の歴史

(1) 文字の誕生

文字というものが、この地上で生まれたのはいつごろでしょうか？また、なぜ、文字が必要となったのでしょう。ここで文字の歴史をみてみましょう。

最初の文字は、絵から始まりました。若い人たちはメールで絵文字をよく使いますが、絵は知らないもの同士の間でも一番共通認識を持ちやすいからです。現在でも周囲を見渡してみると交通標識や建物のサイン、天気予報、今皆さんが身に着けている衣服にも絵による記号がつけられています。

集団を構成する人間の数も少なく、社会もそれほど複雑でない時代は絵で表した

記号で互いが十分に意思の伝達ができました。ただ、もう少し、社会が複雑になり、人間の思考も少しずつ、広がってくると、モノだけではなくて、抽象的なことも絵で表さなくてはならなくなります。絵そのものが持つ意味のほかに、象徴性を持たせるようになってきます。例えば、翼を広げて飛ぶ鷲はリーダーの勇気や戦での勝利を意味するとか、脱皮を繰り返す蛇は若さと永遠の生命の象徴とか、苛酷な岩砂漠を生き抜くコヨーテは年長者の知恵の象徴を表わすなどです。少し長い説明には、何種類かの絵を組合わせます。弧を描いた半円の下に3つの太陽があれば、目的地まで3日かかったことを表しています。もっとも古い絵文字（ピクトグラム）は、紀元前 4000年前ころに書かれたもので最古の文明の発祥地とされる、チグリス・ユーフラテスのデルタ地帯で発見されています。しかし、絵文字だけでは限界がやってきます。

集団がだんだん大きくなり、一つの社会が形成されていくにつれて、共同体の構成員を対象とした伝達や法令の布告、商取引などのために共通の記号が必要となります。また自然の動きに生存が左右されることが日常的であった古代社会においては、人間を取り巻くすべての世界を司る多くの神々への祈りや奉納はかかせませんでした。神々への祈りや讃歌は最初、歌のように「言葉」のみで発せられましたが（神々の知恵や秘密の教えは、あえて文字に残さず、師から選ばれた弟子へ、父から子へと言葉だけで伝承されました。ソクラテスは魂が篭った生きた言葉は「話し言葉」であり、「書き言葉」は単にその写しであるとみなしていましたし、プラトンも言葉による直接対話を重んじ、アリストテレスも言葉による講義を思想伝達の第一とみなしていました）、それを共同体の共通の思いとして神に捧げるために書き記す必要が出てきます。それは共同体の一体化を構成員全体で確認するためでもあります。

神は「はじめに言（ことば＝ロゴス）があった。言（ことば）が神と共にあった。言は神であった。・・・万物は言によって成った。言によらずなったものは何一つなかった。・・・」と新約聖書の「ヨハネ伝」にあるように、この世界は神の言葉によって成ったと宣言しているのですから、人間は神の言葉を寸分残さず正確に知ることが、自分たちの生存にかかわる重要なことであると認識せざるをえません。この世のすべてを神が知っているというのですから。

神の言葉を書き記した聖書は、「書物の中の書物」と呼ばれますが、この世界は神であれ、人間であれ、まず言葉が最初にあり、やがてそれを共通の認識とするために、記号で書き記すことが始まったのです。文字の誕生です。文字が神やそれと同等の存在によって人間にもたらされたという伝説は世界各地にあります。

肥沃な三日月地帯、チグリス・ユーフラテス両河の沖積平野で文字が生まれた頃、エジプトでは水辺に生えるパピルスの茎を加工して書写材料を作っていました。文字は世界各地で自然発生的に生まれましたが、その地域の書写材料がどのようなものかによって、その形はある程度条件付けられます。パピルス（Papyrus）は英語の paper の語源となったもので、2メートルにもなるカヤツリグサ科の大型水草です。パ

ピルスは姿が美しいため、鑑賞植物として園芸店の店先でみることができますから、園芸店の観賞植物コーナーに行ったときは探してみるのもよいと思います。

パピルス紙の作り方は、茎の外皮を取り除き、内側の繊維を細く長く切って縦横に並べていき、最後に重しをします。すると繊維からでた粘液で繊維が貼り合わさって、薄い紙のようになりますから、それを乾燥させると書写材料のパピルス紙の出来上がりです。パピルス1枚の大きさは約16センチ四方で、それを20枚ほど連ねて1巻としました。パピルスはナイルデルタの特産品で、古代エジプト王国はパピルスの生産と取引で莫大な富を蓄積したといわれています。薄く脆いパピルスが生み出した富で、あの巨大なピラミッドができたのですね。パピルスはエジプトの独占品に近いものでしたから、エジプトがパピルス紙の輸出を止めると、書写材料に困る地域がでました。後ほど述べるエジプトの古代アレクサンドリア図書館、その古代最大の図書館と覇を競った小アジアのペルガモン図書館（現在の位置はトルコ北西部にあるペルガマ市）では、エジプトからパピルスの輸入を止められたことで、仕方なく羊の皮や子牛の皮をなめしたものを書写材料に使いました。しかし、これが、パピルスより耐久性があり、読むのにも不便で持ち運びにも不便な巻子本（かんすぼん＝巻物。パピルスを使った書物は巻子本の形態をとりました）から、冊子本（さっすぼん＝コーデックス。羊皮紙などで作ったページを重ね合わせ、片側の一辺を綴じる形式）に書物の形が変わっていく転換となったのですから、何が新たなきっかけとなるかわかりません。今、羊皮紙のことをパーチメントと呼びますが、この言葉はペルガモンの地名から来ているものです。

パピルスは脆くて、紙が一般的となった現在では書写材料として使われることはありませんが、羊皮紙は現在でも重要な法律文書や条約、契約文書などには使われています。

(2)ヒエログリフ

さて、みなさんが古代エジプト文字としてまず頭に思い描くのは、ヒエログリフとよばれる象形文字だと思います。ヒエログリフは神聖文字とも呼び、この文字はエジプト神話の「知恵の神」であるトト神が人間に教えたものだと伝えられています。トト神は人間の身体にトキの頭を持つ神です。ヒエログリフは装飾にもよく使われますから、どこかでヒエログリフを目にした時は、知恵の神トトを探してみてください。文字はトト神が作ったということから「神々の書記官」とも呼ばれます。書記官の記す言葉は神々の言葉であり、言葉は神聖なものとみなされていました。トト神の属性はこのほかに魔法、医術、天文学、時間、法律であり、夜を司るのもこの神の役目でした。属性に魔法があるというのが興味深いところです。魔法には言葉による呪文が必要ですから、言葉というものは、この世の秩序を規程するだけでなく、人間には不可視の世界を開くためには必要な鍵なのかとも思います。

ヒエログリフは鳥や動物や手や足など人体の一部などが描かれていて、一見する

と絵文字のようですが、一つの形は単語一つを表すこともあれば、単に音だけを表すこともあり、複雑な文字体系を持っています。ヒエログリフは書くだけでも大変時間のかかる根気のいる仕事で、その知識を持つ書記は社会的に大変高い地位を与えられていました。ここ数年、ヒエログリフについて書かれた本の出版が増えています。何故でしょうか。理由はちょっとわかりません。

ヒエログリフは神々や王を褒め称える文書や神殿の壁、ピラミッドの内壁やミイラを収めた棺等に描かれました。ヒエログリフは原則として右から左に読むものですが、鳥が左を向いている場合は、左から右へ、その逆の場合は右から左へというものですが、途中に高位の神様が出てくると、文中の人や鳥の頭はみなその神様の方を向きますから、読む方向が分からなくなってしまいます。ヒエログリフは下から上に読むこともあるし、右から左に読んでいっても、次の行では左から右へ読むこともあります。1 行ごとに読む方向が違う表記法を「ブストロフェドン」(牛耕法)といいます。「ブス」は古代ギリシア語の牛の意味で、文字通り、犂(すき)を引いた牛が畑を行き来して耕しているような書き方のことです。

このヒエログリフを解読したのはフランスのエジプト学者シャンポリオン(1790～1832)です。彼は語学の天才だったらしく9歳でラテンを話し、17歳までに13ヶ国語(それも殆ど古語。コプト語、アムハラ語、ヘブライ語、サンスクリット語等)をマスターしたというのですから、やはり天才でしょう。彼は 19 歳でグルノーブル大学の歴史学の教授に迎えられています。

シャンポリオンがヒエログリフ解読のきっかけとなったロゼッタストーンの写し(拓本)を初めて見たのは、兄に連れられていった数学者フーリエのサロンでのことです。その時、彼は11歳でした。フーリエからこの古代エジプト文字がまだ解読されていないことを聞いたシャンポリオンは、自分が絶対に解読してみせると心に誓ったというのですから、語学の天才とはいえ恐るべしです。その後、ヒエログリフ解読に成功したのが 31 歳ですから、解読までに 20 年の歳月が流れています。まさに継続は力なりです。

ナポレオンのエジプト遠征の時に(1798 年)、アレクサンドリア近くのナイル河口で発見されたロゼッタストーンは、ヒエログリフ、デモティッシュ(民衆文字)、ギリシア文字がそれぞれ三段に分かれて刻まれていて、シャンポリオンは彼自身の古代ギリシア語の知識と他の出土品に記された文字との比較研究から、ヒエログリフを解読していきました。シャンポリオンがヒエログリフの解読に成功したことで、古代エジプトの歴史はようやく白日の下に姿を現しました。シャンポリオンは後世、「エジプト学の父」とよばれています。

デモティッシュとはヒエログリフの草書体です。ヒエログリフは書くのに大変な時間がかかります。実際にヒエログリフを書いてみるとよくわかります。手紙等で早く伝達をしたい時には向きません。そこでヒエログリフの鳥や人や動物などの絵文字を簡略

化して抽象化したのが、ヒエラティッシュ（神官文字）で、ヘロドトスの『歴史』を読むと、神官が用いた文字なのでヒエラティッシュ（神官文字）と呼ばれると書かれています。読み方も難しい「ブストロフェドン」ではなく、固定的に右から左に読みます。B.C.650 年頃になるとヒエラティッシュよりさらに流れるような書体を持つデモティッシュ（民衆文字）が現れますが、社会の動きが早くなり、文字で記録する機会が多くなると字はどんどん簡略化して抽象化していくことがわかります。

時代が下るにつれ文字が簡略化していくことは、漢字を発明した中国でも具象的な篆書、隷書（はんこの字体を思い起こしてください）から楷書、草書、行書の順で文字が簡略化していくことからもわかります。

日本では中国から入ってきた漢字からさらに、カタカナ、ひらがなという仮名文字が生まれました。伊呂波四十八文字は弘法大師空海が作ったという伝説がありますが、普通の人間の知識を超えた天才空海が文字を作ったというところは、エジプトの知恵の神トト神が文字を作った話と共通するところがあります。

(3) 楔形文字

エジプトから目を東に向けると、そこは楔形文字の誕生した世界です。楔形文字も最初は絵文字から始まりますが、次第に簡略化されて、楔を組み合わせることで意味を持つ文字を作りました。

楔形文字の特徴は、多くの民族が行き交ったこの地域にふさわしく、古ペルシア語、アッカド語、アラム語などの外国語も楔を別の形に組みかえることで表記できたと言いますから、アルファベットと同じような性質をもっています。楔形文字も長い年月使われぬまま、ヒエログリフと同じように解読不明文字となっていましたが、1847 年ペルシアに派遣された若いイギリス士官のローリンソン（1810～1895）によって解読されました。解読のきっかけとなったヴェヒストゥーン碑文は、楔形文字の古ペルシア語とバビロニア語、スーサ語の 3 種類のことばで記され、文字の読めない人のために絵もついていました。「エジプト学の父」がシャンポリオンならばローリンソンは「アッシリア学の父」と呼ばれています。

(4) アルファベット

世界で最も使われている文字の一つであるアルファベットは B.C.1500 年頃地中海を舞台に海洋交易に従事していたフェニキア人（現在のレバノンやシリアあたりに居住していた人々）が使っていた文字から発展したといわれています。最初フェニキア人たちは書写材料として粘土板を用い、楔形文字を使って記録をしていましたが、パピルスがエジプトから輸入されるとともに、重くて持ち運びの不便な粘土板を捨て、文字もエジプトのデモティッシュを使い始めました。彼らはデモティッシュをさらに簡便化し、象形文字の部分を捨て、表音文字だけを採用して、一つの文字が一つの音を表し、その文字を組み合わせることで単語を作りました。アルファベットは漢字などとちがい、表音文字です。

アルファベットは現在 26 文字ですが、最初のフェニキアアルファベットは 22 字でした。アルファベットは早く、能率よく書ける文字であり、ヘロドトスは地中海沿岸の人々に文字を教えたのはフェニキア人であると述べていますが、空飛ぶビジネスマンならぬ、海上を行くビジネスマンフェニキア人のイメージを髣髴とさせる話だと思います。

(5)漢字

さて、最後に東アジア圏の文字の母体となった漢字に付いて少し話をします。漢字はみなさんに身近な文字ですから、漢字のルーツが象形文字であることはわかると思います。現在の漢字の原型はヒエログリフや楔形文字が生まれた頃とほぼ同時代に生まれています。漢字は絵文字から始まり、意味と音を表す記号を組み合わせて成り立っています。もっとも古い漢字は神意を聞く占いに使った甲骨文字ですが、漢字の基本構造は 3000 年前から変わっていないということもすごいことです。

漢字の特徴は口語に依存しないということです。発音は同じでも文字が違えば意味も違います。コウ(hong)と発音は、思いつくだけでも「紅」「弘」「鴻」「洪」「虹」「宏」etc.これだけの文字があります。しかし、文字を目で見れば発音がわからなくても意味はわかるというのは漢字の持つ特徴でもあります。

漢字を作ったのは、蒼頡(そうけつ)という目が四つある史官であったと伝わっています。蒼頡は中国の伝説の皇帝の一人で身体は龍であったといわれる黄帝に仕えていました。史官とは歴史を記録することを仕事とする人間のことですが、中国は司馬遷の『史記』以来、歴史を書き記すことに非常に意義を置いてきた国ですから、史官の仕事は重要でした。

史官であった彼は鳥の足跡や天体を見て漢字を作り出したといわれています。魯迅は「文字は誰が作ったか？」という文章の中で、蒼頡をとりあげて「目が二つだけのわれわれ風情では、能力はむろんのこと、容貌からして不適格なのだ」とのべています。尋常ならざることを成し遂げるには、人間離れした容貌魁偉な人物でなければできない、このことは即ち、尋常ならざることをするには人間の枠にとどまっていてはできないと魯迅は言いたいのでしょうか。この蒼頡が文字を作ったことについて一つ面白い話が伝わっています。

『淮南子』(えなんじ　前 120 年頃成立)という本の中には、蒼頡が文字をつくったことで、「天は粟(ぞく)を降らし、鬼は夜泣いた」と記されています。これはどういうことでしょう。それは、蒼頡が文字をつくったことで、今まで生業としていた農耕を棄てて文章を仕事とするものが続出して、畑を耕すものがいなくなり、その結果、米や粟が不足し、民が飢えるのを恐れて天は食料を降らし、鬼(中国では死者の霊)は文字によって弾劾されるのを恐れて夜な夜な泣いたというのです。

面白いとは思いませんか。西洋やオリエント世界では、文字は神の言葉や神の代理人として地上を統治する王たちの言行を記録するためのものとして、神から人間

に与えられたものであり、文字の国中国では、神は人間（蒼頡は官僚）が文字を発明したことで、人が怠惰になることを憂え、鬼神は弾劾されることを恐れて泣く。神が主体か、人が主体か。比較文化学から見てもこの洋の東西の違いは興味深いものです。

5. 図書館の歴史

さきほども述べたように人は地球上で唯一書き記すという行為をする生き物です。人が生きていくうえにおいて有用な思索や知識は文字によって書き留められ、書き留められたものの形である図書は、古代においては皇帝や王の図書館（アッシリアのニネヴェの王宮図書館やプトレマイオス朝エジプトのアレクサンドリア図書館、古代ローマ、ビザンチンの図書館、漢の宮廷蔵書処 etc.）、中世には修道院の図書館（6 世紀頃から）や古代ローマの文化の継承を理想としたフランク王国のシャルルマーニュの宮廷図書館（9 世紀初頭）の中で、その場所に入る資格があり、文字を読むことができるごく少数の人々に読みつがれてきました。そこで読まれた本は多くがキリスト教の文献です。それ以外の文献は見ることさえ禁じられていました。この時代の知識について描かれた興味深い小説があります。映画にもなりましたから、見た人がいるかもしれません。

みなさんは『薔薇の名前』という本を知っていますか？ウンベルト・エーコというイタリアの記号学者が書いたもので、北イタリアのアペニン山脈の中腹にあるベネディクト派の修道院を舞台としたミステリーです。この作品からは当時の知識、学術というものがどのように理解され、管理されていたかをうかがうことができます。

ストーリーは、旅の修道士バスカヴィルのウィリアムが従者のアドソとともに、訪れた修道院の写字室（スクリプトリウム）で、まるで『ヨハネの黙示録』を思い起こさせるように 7 日間連続で 7 人の修道士が殺される事件の謎解きにあたるというものです。事件が起こったのは 1327 年、世界史的に見ればイタリアではダンテやボッカチオが出て人文主義が盛んになる時代、イングランドではフランスとの百年戦争の幕が切って落とされ、ドイツではエックハルトなどの神秘主義が勃興した時代、スペインではイスラム教国のグラナダ王国の全盛時代です。この事件が起こった年から 20 年後には、ヨーロッパ全土に黒死病が蔓延し、ヨーロッパの人口は激減します。東アジアでは、中国は元の中期、日本ではまもなく鎌倉幕府が滅亡する時代です。

『薔薇の名前』は非常に綿密に書かれたフィクションですが、哲学でも文学でもそれが書かれた背景や作品が描いている時代を知ることは、その本を深く知る上でとても大事です。

これからこの話を読んだり、見たりする人のために犯人の名前は伏せますが、7 人の

修道士が殺された理由は、「ある本」を見たためです。このある本とは、古代ギリシアのアリストテレスが著した『詩学』第二部です。この本では、人間性に根ざす笑いが肯定されています。当時のキリスト教会の公式見解では、イエス・キリストは笑わなかったとし、笑いは人間を堕落へ導く悪しきものとされていました。ですから、アリストテレスのこの本は「禁書」とされて修道院の奥深く隠されていました。普通の修道士では見ることすら禁止され、禁書を見ることは死ぬことにサインすることだったのです。アリストテレスの著作だけではなく、キリスト教成立以前に著された古代ギリシア・ローマの書物の中でも思想書、哲学書は、焚書にはあわなかったとしても、修道院の奥深く隠されていました。

しかし、どのように停滞した時代に見えていても時代は動くものです。11 世紀初頭から 13 世紀末（1096-1291）に行われた十字軍による東方イスラム圏への遠征は、ヨーロッパ社会が大きな変化を遂げるきっかけとなりました。

それは、キリスト教神学によって長く秘されていた古代ギリシア、ローマ時代の思想や文芸を再発見させ、また当時のヨーロッパよりはるかに進んだ数学、天文学や医学などの科学知識をもたらしたのです。各国はこれらアラビア語で書かれた図書を当時のヨーロッパ世界の共通語であったラテン語への翻訳を進めたことで、それまでのキリスト教神学中心であった学問世界から、人間生活に必要な科学や、神ではなく人間を見つめた哲学や思想へ知的関心が高まってきたのです。歴史上ではこの時代を 12 世紀ルネサンスと呼びます。神を知るための学問から、人間を知るための学問の出現は、やがてくる人文主義を導く萌芽となります。この動きは 12 世紀末から始まる各国の大学の創設にもつながります。

（1） 大学図書館

ヨーロッパの主な大学は、12 世紀末から 14 世紀にかけて各地の王侯貴族や教会によって創設され、大学には図書館が必ず設立されていました。本がなければ学習や研究ができないからです。これは現在でも図書館が大学の心臓部といわれるゆえんです。しかし、この時代の図書館に所蔵されている本は、現在の印刷され、製本されている本とは全く様子が異なります。15 世紀中葉にグーテンベルグによって活版印刷術が発明されるまで、修道院や大学の図書館に所蔵されている本は、羊皮紙やヴェラム（子牛の皮をなめしたもの）に、人間が一字一字書き写した「写本」です。本は簡単に手に入るものではなく、宝物に等しい財産でもありました。実際、諸侯や修道院は富に任せて、豪華な写本を作成しました。みなさんもアイルランドのダブリンにあるトリニティ・カレッジの『ケルズの書』（8 世紀後半頃）や大英博物館にある『リンディスファーン福音書』（7 世紀初頭頃）、フランス国立図書館にある『シャルルマーニュの福音書』（8 世紀後半頃）、フランス学士院が管理するパリ郊外シャンティー城内コンデ美術館所蔵のフランス王シャルル 5 世の弟であるベリー候が作らせた『ベリー候のいとも豪華なる時祷書』（1416 年頃）などは有名な彩色写本ですから、一度はどこかで目にしたこと

があると思います。これらの写本は、所蔵者の富や権威を誇示するものであり、所蔵者以外の利用を念頭に作成されたものではありません。

しかし、大学図書館にある本は、個人が楽しむためのものではなく、学生や教師が学習や研究のために利用する本です。大学図書館では学生数が増加するにつれ、複数の人間が 1 冊の本を利用するという状況がおきてきます。本は一部の人間の所有物から、多くの人に知識を伝達するものになります。みなさんは、書架に鎖でつながれた本を見たことがありますか。これは本の盗難防止という目的よりも、本を一部の者の利用にとどめるのではなく、多くの利用者を念頭に置いた、利用を前提とする図書館の始まりと考えてよいのです。その場所にいけばいつもその本があるということです。

大学図書館にどのくらいの蔵書があったかというと、神学、法学、医学、学芸学部の 4 つの学部を持っていたパリのソルボンヌ大学の 1289 年の目録には 1017 冊、1338 年には 1722 冊とあり、本は自由七科の主題で分類され書架に並んでいました。現在からみれば非常に少ない数字ですが、当時の本は写本であり、1000 冊を超す蔵書を持つ図書館は大図書館です。それでも、学問や人の行き来も盛んになると学生は、自分の所属大学に止まらず、新しい理論を展開する教師や東方からの本を多く所蔵する大学図書館があると聞くと、ヨーロッパ各地の大学に勉学にでかけていきました。

彼らは遍歴学生と呼ばれました。先頃亡くなった阿部謹也さんの翻訳書に『放浪学生プラッターの手記　：　スイスのルネサンス人』(1985 年、平凡社刊)という本があります。なぜ、学問をするのかについてとても面白いことが書かれていますから、大学生活の早い時期に読むことをお勧めします。

12 世紀ルネサンス以降、学問の領域は広がり、人の動きも活発になります。13 世紀に入るとあいつぐ十字軍出兵による財政的な疲弊と宗派内部での争いによって教皇権は衰え、学問の中心であった教会や修道院図書館は衰微し、かわって文化や学問の中心は、東方交易によって富を蓄積した北部イタリアの新興都市貴族や大学に移ります。時代はダンテやボッカチオやペトラルカが著作を生み出し、ギリシア・ローマの古典文化の復興を目指した人間主義的文化運動＝人文主義の時代を迎えます。ルネサンス前夜です。

当時イタリアの諸都市は、人文主義思想を背景として、東ローマ帝国の滅亡と混乱によって流浪してきたビザンチンの学者を受け入れたり、イスラム文化圏からの学術的な影響も受けて、古典文化の復興に力を注ぎ、古代ギリシア、ローマ時代の思想や文学や自然科学の写本を収集し、また作成に力を入れました。

フィレンツェのメディチ家の大公ロレンツオは、ギリシア語写本の収集で有名ですし、マントヴァのエステ家、ローマのヴィスコンティ家でも同じ様に写本の収集に力をいれます。彼らは、収集した写本の蔵書目録を作成し、蔵書を市や寺院に寄託して図書館を作り、一般市民(高額納税者である有力市民)に公開しました。これらの図書館は

一種のステータスシンボルであり、権力と富を持つものが知識を最も多く手に入れるという構図は古代以来全く変わりませんが、ここでようやく、知識が市民に開放されたのです。

(2) イスラム世界

ルネサンスに入る前に、当時のヨーロッパ世界に大きな影響を与えたイスラム世界の図書館について少し話をします。8 世紀に預言者ムハンマドによって始められたイスラム教の聖典は『コーラン』ですが、ムハンマドの後継者たちは、この『コーラン』の写本を大量に作成して人々に配布しました。このことは、アラビア語の標準化と知識の一般化をもたらしたといわれます。『コーラン』には、あらゆる知識を重んじなければならないこと、そしてよきイスラム教徒は不断に知識の習得に努めなければならないことが記されています。『コーラン』の中には、「人は生まれてから死ぬまで知識を求めていかなければならない」、「知識と火こそが、広がることにより、さらに盛んとなる二つのものである」と記されており、知識の収集と獲得は、信徒の務めでもありました。本はモスクに収集され、資産を持つものは、本を寄贈したり、写本作成のためのお金を出すなど、モスクの蔵書を豊かにすることが求められました。モスクは祈りの場所であるだけでなく、写本生産の場であり、学習や研究、外国の文献のアラビア語への翻訳など知的生産活動の場所でもあったのです。モスクにある本は、誰でも読むことができ、アラビア語に翻訳された古代ギリシアの古典を見るために、各地からの学者もやってきました。修道院がキリスト教神学に限定した学術のみを認めていたのとは異なります。このようなイスラムの学問のありかたが、ヨーロッパの人文主義に影響を与えたことは否めません。

8 世紀初頭から 15 世紀末までイベリア半島はイスラム教徒の王朝が支配していましたが、11 世紀頃のスペインでは、宗教にとらわれない自由な精神で、数学、天文学をはじめとする科学や医学が高い水準で究められ、1085 年にトレドがキリスト教徒の支配下になっても、トレドはイスラムの高い水準の学問を取り入れる窓でした。モスクには、様々な分野の知識即ち本が収蔵されていたからです。

(3) 印刷術の発明

人の行き来が次第に盛んになり、知識や新たな学術の探求が次第に強くなって、本の需要も高まりましたが、写本作成には大変な時間とコストがかかります。中世の大きな修道院は内部に写字を専門とする修道僧たちを抱え、写本生産も行いましたが、その量は多くはありませんでした。キリスト教神学を学ぶ対象は限られていたからです。それと対照的に大学は Universe をその語源とするように、様々な主題の学問を行う場所です。大学は創立の時から図書館を持ち、大学内部に写本生産の場を持っていましたが、時代とともに学生の数が増加し、共通のテキストである教科書の需要も増えてくると、写本生産も追いつかなくなります。このように本に対する需要が高まる中で、必然的に登場したのが活版印刷術です。

15 世紀中葉 1450 年のグーテンベルグによる印刷術の発明は、それまで人間が手で書き写してきた写本という本の形態から、同一原版による数百数千単位の刊行部数が可能となりました。多くの人々の手に本を行き渡らせることができるようになり、本は遠隔地にも運ばれるようになります。同一文献を多くの人が手に出来るということは、それを読んだ複数の人々が共通の認識を持ち、討議できる条件ができたということです。学問は切磋琢磨されることで発展していきます。印刷術の発明と進歩は、本に翼を与え、知識や思想は広く伝達されて、やがてそれは枝葉を伸ばし、それぞれの地域の中で独自の発展を遂げて現代につながる学問として形成されていったのです。

印刷術の発明で多くの本が刊行されるようになると、図書館の役割も変わってきます。数少ない写本を大切に保管し、限られた一部の人々に供するだけであった場所から、印刷本による知識の拡散によって火薬庫の中に火花が飛び散るように学術の花が開き、図書館は次から次へ刊行される本即ち人類の思想の営みの連続性を蔵書として保管し、分類し、整理して多くの人々に提供するという利用中心の場へと大きく変わっていったのです。図書館は人類の記憶の収蔵庫であるとともに、知識の提供場所となりました。

欧米の公共図書館の利用率は、日本と比較して現在でも非常に高いですが、その理由の一つは本と図書館が人々の間で、自分たちの生き方や生活に重要で欠くべかざるものという意識があり、本即ち知識は個人が所蔵するものではなく、知識は万人で共有するものであるという認識があるからではないかと思います。

(4) ルネサンス

古代、中世と辿ってきた本と図書館の歴史は、15 世紀に入ると一つのエポックメーキングの時代を迎えます。神のための学問から人間のための学問へという人文主義を経て、自然現象への科学的探求と文芸復興のルネサンスとよばれる時代です。この時代は世界史上で大航海時代と呼ばれる時代でもあります。バルトロメオ・ディアスの喜望峰発見、コロンブスのアメリカ大陸到達、バスコ・ダ・ガマのインド航路発見などは、印刷本というメディアでヨーロッパ各地に伝えられました。王侯貴族から庶民まで、世界は大きく動いていることを実感したことでしょう。印刷術の発明によって本の大量刊行が可能になったことは、20 世紀後半のインターネットの出現と同じくらい革命的な出来事であり、学術の進歩、拡大に資するところは非常に大きなものがありました。

(5) 16～18 世紀

(ドイツ)

次の 16 世紀から 18 世紀は、各国、各地域において近代図書館の礎が形成される時代です。ドイツではプロイセンやバイエルンなど地方の有力な封建諸侯が私設図書館を作り、スペインから分かれたハプスブルグ家のフェルディナンド 1 世（在位 1556-1564）がウィーンに宮廷図書館を作ります。最初は私設図書館の域をでなかったこれらの図書館は、地域の発展とともにベルリン、ミュ

ンヘン、ウィーンというヨーロッパ有数の公開図書館になっていきます。

（フランス）

一方、フランス、スペインなどの絶対主義王朝のもとでは、本も中央集権的な手法で王や皇帝のもとに集められました。フランスではフランソワ 1 世（在位 1515-1547）が 1537 年にモンペリエの勅令を発布して、フランス国内で刊行された図書は必ず、フォンテーンブローにある王室図書館に納めることを義務付けました。法定納本制度の始まりです。その後、王室図書館はパリに移りますが、ブルボン王朝の宰相たち、ルイ 13 世の宰相リシュリュー（1585-1642）、マザラン（1602-1661）、コルベール（1619-1683）の 3 人は図書の収集で著名ですが、とくにルイ 14 世の宰相マザランのコレクションは 4 万冊を誇り、マザランのコレクション作成に携わった司書ガブリエル・ノーデの『図書館建設に関する意見書』（1627）の卓越した意見に基づいて、有力納税者には蔵書を公開しています。1643 年には週 1 回でしたが、1648 年からは毎日開館するようになります。当時の図書館の開館日時は、所有者の都合次第でとくに定まったものはありませんでしたから、完全開館を行ったノーデの考え方は近代の図書館運営の端緒となるものでした。

（スペイン）

新大陸からもたらされる富と強大なカソリック勢力を背景として絶対王政が敷かれたスペインでは、1563 年フェリペ 2 世（在位 1556-1598）がマドリッド郊外にエスコリアル宮殿を築き、そこの大広間の壁面を天井まで届く書架にし、収集した本を豪華な装丁で並べましたが、内部には書見台が置かれる程度で、図書を長時間読むための閲覧机などはありません。人が長時間いることは想定されていませんから、暖房装置もなく、冬は閉じられたままであることも多かったのです。このような形式の図書館を大広間図書館と呼びます。ヨーロッパの古城を訪ねると、城内にこのような形式の図書館を持つ城が少なからずあります。ここでは本はインテリアや装飾品と同じで利用するというよりも、王の権力を誇示する一つの装置でした。

（イギリス）

一方、ヨーロッパ大陸のはずれにあり、国王と貴族の長い戦いの歴史を持つイギリスでは、長い間、納本制度を持つフランスやスペインの王室図書館のようなものはありませんでしたが、内容的にこれに該当するものとしては、オックスフォード大学のボードレアン図書館があげられます。この図書館は、人文主義者の外交官トマス・ボドレー卿（1545-1613）が母校オックスフォード大学の図書館を再建したもので、彼はトマス・ジェームズを主任司書とし、資料の選択、収集、管理に当たらせ、1610 年には印刷出版業組合との間に出版物納本協定を結び、同組合に所属する印刷業者が出版した本を図書館に 1 部納本させ

ることにしました。トマス・ボドレーの名前を冠したボードレアン図書館は、18 世紀中頃に大英博物館の中に図書館部門ができるまで、国立中央図書館の役割を担っていました。

（6） 17～18 世紀

啓蒙の世紀である 17 世紀から 18 世紀は、学問の体系化が進んだ時代ですが、社会の動きでは、イギリスでは産業革命を経て、歴史の舞台に一般民衆が前面に登場し、フランスでは市民革命（1789）によって王政に終止符が打たれ、アメリカでは独立宣言（1776）が発せられます。ヨーロッパ諸国では、複雑な政治情勢を反映して各地に民族主義が台頭し、各国は自国民の国民意識を高めるために、競うようにして国内のコレクションを収集し、自国に大図書館を建設したり、もとからあった図書館を拡張し始めます。1759 年に大英博物館（図書部門もこの中に設置）が生まれたのも、フランスに対抗してといわれています。

産業革命の進行の中で過酷な労働環境におかれたイギリスの労働者階級や各国の一般庶民は、フランス革命により王政を倒し、「すべての市民は法の下に平等である」というフランスの人権宣言や啓蒙思想の浸透による平等意識への覚醒、ナポレオン戦争を契機とした情報流通の拡大、あいつぐ新聞や雑誌の創刊を契機とした近代ジャーナリズムの誕生などで、自己の権利に目覚めていきますが、それを支えたのが読書であり、図書館でした。

(7) 19～20 世紀

19 世紀になるとイギリスを筆頭に各国は植民地経営に乗り出しますが、そこであがった富の蓄積は、本国に経済的な繁栄をもたらし、とくにイギリスはヴィクトリア女王治世下において、歴史上初の大国の地位を手に入れます。そのような中でヨーロッパの大国から遅れをとっていたイギリスは、世界各地域の植民地や探検で得た資料も加え、国力発揚の場として図書館の充実に力を注ぎ、大英博物館の図書館部門は世界最大級にまで膨れ上がります。

ヨーロッパ列強各国の領土拡張主義は、各国の中央図書館政策においても同様でした。国家の中央図書館は建物、蔵書量とともに巨大化しますが、その一方で産業革命以来始まっていた市民の読書への要求は、1850 年のイギリス議会の「図書館法」の制定を端緒として、各国でも地方自治体に対して地域住民のための公共図書館設置を義務付ける動きも加速化してきます。

海の向こうのアメリカでも 1848 年にマサチューセッツ州のボストンで最初の図書館法が発布され、ボストン公共図書館が開設されたのは 1854 年です。これを端緒として、東部諸州は図書館法を次々に制定し、各地に公共図書館ができていきます。

国家や地方自治体などの公的機関による図書館建設のほかに、アメリカでは 19 世紀の後半、石油と鉄鋼業の隆盛によって経済好況が生まれ、経済的に成功

した個人からの寄付によって多くの公共図書館が建設されました。鉄鋼王とよばれ、カーネギー・ホールにその名を残すアンドリュー・カーネギーは、その寄付によって生涯に 1665 館の公共図書館をつくりました。個人の寄付による図書館や美術館、病院などの公共施設の建設はアメリカの特徴です。

（8）　20 世紀～

20 世紀は戦争の世紀といわれ、20 世紀に入って失われた資料は少なくありません。一方で第二次世界大戦以降の科学技術の急速な発達と出版物の増加は、もはや一図書館ですべての図書を持つことを不可能にしました。図書館は国際的な相互協力の時代に入ったのです。19 世紀後半から各国の国立中央図書館は蔵書目録を作成し、冊子体を刊行します。冊子体目録の時代は長く続きますが、20 世紀の発明物であるコンピュータの出現は、目録の MARC（機械可読目録）化を可能にし、第二次世界大戦後まもなくジュネーブにおいて「世界書誌」（世界中の本の目録を作る）作成計画がユネスコで検討され、やがて 1961 年の国際図書館連盟（IFLA）によるパリ目録会議でガイドラインが作られます。その後、1975 年には国際標準書誌記述（ISBD＝International Standard Bibliographic Description）が制定され、世界各国の図書館は ISBD を基準とした目録作成を行っています。World Cat のような世界中の書誌所蔵情報の目録録はインターネット上で公開され、私たちはいながらにして世界の図書の情報を探すことができます。

20 世紀後半には、電子ジャーナル、電子ブックが出現し、図書館という場所に来なくても、資料が利用できるようになりました。過去から現在まで作成された世界中すべての資料が電子化されることは考えられませんが、今まで図書館が持ってきた機能や果たす役割が大きく変わってくることは確かです。グーテンベルグの印刷術の発明は、人類に大きな転換をもたらしましたが、20 世紀のコンピュータの発明とその後の情報技術の発達は、人類にグーテンベルグ以来の大転換をもたらし始めています。

10 年後、20 年後の図書館のかたちは現在とは随分変わっていると思いますが、図書館の役割は人類の記憶の保管場所であり、古今の知識を提供する機関であることはかわりません。

（9）日本の図書館

記録資料を収集し、保管するという意味で日本で最初に現れる図書館は、大宝律令（701）によって中務省のもとにおかれた図書寮（ずしょりょう）です。図書寮は「経典、国書、国史の集纂をする」ところと規程されていますから、学術文献を収集して保管し、学問を行うもののために提供する図書館というよりは、文書館的な性格のものであったようです。この図書寮という名称は江戸

時代を通じて残っていきます。

自らの学びのために図書を収集し、求める人に公開したのは石上宅嗣（いそのかみ　やかつぐ）の個人文庫である芸亭（うんてい）が最初の公開文庫であるといわれていますが、どのような資料を収集し、どのような形で、どのような人たちに公開したのか、よくわかっていません。

平安時代以降は力を持った貴族たちが私設の公家文庫をつくりますが、ヨーロッパと違い、建物は木で作られていることもあって残っていません。藤原定家の『明月記』などの貴族の日記などの記述から推定するしかありません。

貴族の勢力が衰えた鎌倉時代以降、武士の時代に入ると図書を収集する主役は武士となります。彼らは一族や家の子郎党のために学問所を作りますが、その付属機関としてできた文庫として神奈川の金沢文庫（13 世紀中頃）や足利の足利文庫（15 世紀前半）があります。資料は儒学が中心であったといわれますが、これらの資料も度重なる戦火に焼け落ち、散逸して、蔵書量やどのような運営をしていたのか、正確なところは不明です。

江戸時代になると幕府を起した徳川家康は学問を好み、蔵書家であったことから、家康は自ら図書を収集するとともに、諸藩に学問所創設を促し、図書の収集を奨励しました。

家康本人も江戸城内に後に紅葉山文庫と呼ばれる「富士見亭文庫」を創設し、将軍職を 2 代将軍秀忠に譲って駿府に移ってからは、駿府城内に駿河文庫を創設しています。その数八百に及ぶといわれた駿河文庫は、林羅山によって管理され、家康の死後、その蔵書は尾張、紀伊、水戸の徳川御三家に分割され、それぞれ蓬左文庫、南葵文庫、彰考館文庫として現在に伝えられています。

将軍家だけではなく、世の中の安定に伴い、諸藩の大名も藩士の教育のため学問所を設け、多くの図書を収集しますが、著名なものとして「天下の書府」と呼ばれた加賀前田藩の尊経閣文庫があります。これはその名前が示すように経書を収集の中心としたものですが、幅広い分野の書物が集められています。

江戸も中期以降になると学問尊重の気風が定着し、5 代将軍綱吉は昌平坂に学問所を設置します。現在の湯島聖堂です。元禄以降は武士階級だけでなく、裕福な町人階級でも蔵書収集に力を注ぐものが出て、大阪の木村蒹霞堂（きむら　けんかどう）は著名です。その蔵書数は 10 万巻を超えたといわれ、その死後は幕府に 500 両で献納させられています。

しかし、藩の学問所に設けられた文庫は、利用者はそこで学ぶ武士と限定され、一般庶民に蔵書が公開されるのは殆どありませんでした。庶民に蔵書を開放するのは江戸も後期に入ってからで、飛騨高山の寺子屋の師匠加藤小五郎を中心とする雲橋社文庫、伊勢の射和文庫（いざわ　ぶんこ）、岡山の経宜堂文庫などは著名です。

これら庶民に開放された文庫は学問をするためのもので、女子どもといわれる一般の庶民は、貸本屋を通じて、その読書欲を満たしていました。貸本屋が提供する本は、主として黄表紙、人情本、洒落本などの戯作といわれるもので、貸本屋が江戸時代の文芸文化の発展に果たした役割は大きく、庶民のための公共図書館の設立を明治時代まで待たなければならなかった日本において、寺子屋の師匠の蔵書や貸本屋は、公共図書館の役割を持っていたともいえます。

6. 図書館の自由について

最後に、みなさんに話しておかなければならないことがあります。それは図書館の自由についてです。みなさんは明治大学図書館だけではなく、相手が拒否しない限り、世界中の図書館の資料を使うことができます。また、様々な分野の本を手にすることもできます。これは、図書館の歴史から見ても稀有なことなのです。

図書館という場所は、人類の長い歴史の中で文字によって書き記されてきた記録を、万人に公開し、後世に伝えるという使命を持つところです。人類の知識のすべてが集まっているところといっても過言ではありません。だからこそ、ゆえに権力を持つ人たちは、図書館の知を支配し、それを管理しようとしました。知識の与奪権は権力を持つ者にあると考えたのです。このことは今まで説明してきた図書館の歴史をみてもわかると思います。

日本でも戦前の図書館には、資料選択に国家からの厳しい干渉がありました。権力が見せたくないと考える資料は所蔵することも認められませんでした。個人であってもその書物を持っているだけで逮捕されたり、拷問を受けて殺されることもあったのです。それほど昔の話ではありません。60 年から 70 年前のことです。

みなさんの中に『ハリー・ポッター』のシリーズを読んだことがある人がいると思います。ファンタジーの世界です。しかし、ハリー・ポッターのシリーズは、魔法を美化し、子供に悪い影響を与えるとして禁書にしている町や学校は実は少なくないのです。カソリック世界の頂点にいる神の代理人ローマ教皇ベネディクト 16 世も、ハリー・ポッターシリーズは若い人たちに悪い影響を与える本であると批判的な見解を公表しています。アメリカペンシルヴァニア州のある町で町じゅうから集められたハリー・ポッターの本が教会の前で積み上げられた、焼かれたことが少し前の新聞に載っていました。私は魔女裁判を思い出しました。ハリー・ポッターの出版国であるイギリスのなかにも、地域によっては、図書館に所蔵することはもちろん、町の本屋でも販売を禁止している自治体もあるのです。

一部の選ばれたものが民衆のために知識を選別する、これはとても危険なことです。ドイツのナチス政権も、一部の美術や音楽を「退廃芸術」と名づけて、作品を破壊したり、画家や音楽家を迫害しました。図書館の蔵書もただ伝わってきたのではなく、生き延びてきたといってもよいのです。

戦後、図書館は戦前の暗い時代を踏まえ、憲法の知る権利を背景に『図書館の自由に関する宣言』の声明を出しました。「図書館は、基本的人権のひとつとして知る自由を持つ国民に、資料と施設を提供することを、もっとも重要な任務とする」というもので、そしてこの任務を果たすため図書館は、次のことを確認し、実践するとして5つのことをあげています。

1. 図書館は資料収集の自由を有する。
2. 図書館は資料提供の自由を有する。
3. 図書館は利用者の秘密を守る。
4. 図書館はすべての検閲に反対する。
5. 図書館の自由が侵されるとき、われわれは団結して、あくまで自由を守る。

これらのことが守られた時、図書館とそこにある資料は、地上でもっとも大切なものの一つになります。失われれば再び手にすることのできない人類の記憶だからです。私たちは、人類の知的遺産＝本（もちろんその中には失敗や愚行の記録もありますが）から学び、さらにそこに新たな知識を書き加えて未来の人類へ伝達することをしなければなりません。図書館とはそういう場所であり、本とはそういうものなのです。

この授業は図書と図書館の歴史を話すものですが、ただ、情報の羅列として歴史上著名な図書館の名前を覚えても意味がありません。蔵書目録に名前は残っているけれど既に消滅して本文は伝わっていない図書、他の書物から存在したことはうかがえるけど、建物の礎石すら残っていない図書館も歴史上にたくさんあります。

みなさんは、キリスト教の本も、イスラム教の本もルネサンスの錬金術の本も、戦前は持っているだけで逮捕されたマルクスの本も、そして古代ギリシア哲学の本も、手にとって読むことができます。これは人類の歴史でもめったにないことなのです。また、現在のような状態が今後も続くという保障はないのです。

図書館が思想の自由に基づいて本を収集し、利用者は自分の意思で読みたい本が読めるという意味をみなさんには考えていただきたいと思います。気がつけば自由はとても狭い範囲のものになっていたというようなことがないようにです。一度狭められた自由を回復することは容易ではありません。

図書館の自由が侵される時は、個人の自由も抑圧される時代です。自由を守るためには、自ら考えて学んでいくしかありません。学生時代4年間、そして卒業後の長い人生も、図書館に来て本を手に取り、そこから学び、さらに新しい知識を発信してください。少年老い易く学成り難し。一寸の光陰軽んずべからず。一生かかっても読める本は僅かです。社会に出ると忙しいことを言い訳にします。学生時代こそ読書の季節です。携帯から読める小説などもありますが、まずは紙の本を手にしてください。その重量は人類の思考の重さ、創造力、想像力のすごさなのです。